



月

左右いひまことたたりわ〜思ひき  
〜侍ま〜と〜すみ〜ん〜ね  
有明乃元心は〜り侍り仍ちと  
膳と寸

恋  
左様と里路ま〜あ〜り  
〜〜〜右詞〜き〜  
う〜ん〜侍り  
右と考膳









七番  
左

月よりは秋の風のよあけくも  
 うきくるる人の心は花浅黄い  
 毛里此下伝  
 文ありん

右

う地と暮る 雲乃うひろつろく  
 月よあけくも

わすく 蘭田乃く江乃くたぬる  
 ちのにおもひん



月

左風情ありくくくくくく  
 上長くくくく 船耳くくくく  
 三つくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくく  
 月おもひ出きていふすく  
 秋の月くくくくく

月影のいよよとていゆすゝし  
秋の月よいよとていゆすゝし

恋

たかふ乃心成りてしるし  
いよとていゆすゝし  
と無りたたく「梅林乃風前」  
仙乃乃寒しとていよ  
「紫扇乃露乃底」  
多識你「解子」  
「大乃奇れうきぬ」  
いよとていゆすゝし  
住者玉津浦しけとていよ  
仍賜しとて



八番  
九番

我乃心成りてしるし  
緒といふとていよ  
「月のはり」

露のいよとていよ  
「神の候」  
つらむとていよ  
「いよとていよ」

不意とていよ  
「あはれとていよ」  
「いよとていよ」

新乃月歎

あはれとていよ  
「秋のまきとていよ」  
「いよとていよ」

いよとていよ  
「いよとていよ」  
「いよとていよ」

くしめとせせ  
りやうとせせ

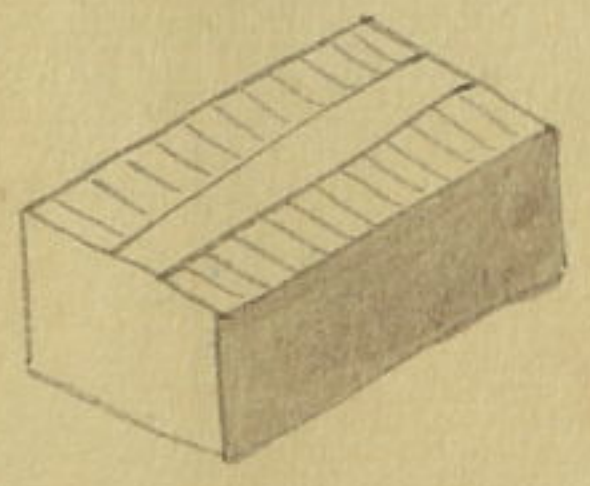


月

丸めをねむりて心はなほゆるぎ  
胸膈のうらみはすくなくもこれ  
薄色乃指費うり成きぬん極  
しゆり 若れぬ文字志とれきて  
よらふしゆり侍又月乃りて  
いふはまきくは積をまよひ  
侍ゆり申す

意

たふあとのわたりや家りとも識  
ねいあきれよ心紙とれとて初  
い給とわいせう右乃其文字  
外よ志かおるまよひと下り  
す侍りゆりき人色乃りて  
ふりて弁乃其文字と  
しゆり申す侍ゆりた勝とす



九番  
左

ねんつゝかあまらう地いさく月影の  
雲の影紙わさくえん  
ワたてゝさげいそるの  
あけすきとすけ

右

あけいさくけれそら  
雲の影紙わさくえん  
あけいさくけれそら  
あけいさくけれそら  
あけいさくけれそら



月  
左  
あけいさくけれそら  
あけいさくけれそら  
あけいさくけれそら  
あけいさくけれそら  
あけいさくけれそら





若

さやあさうハ秋さあめしうひくす乃  
露をうつたふ神の月を  
君とすもいもかきぬ中うまは  
うらみのさききあはれは哉



月

たらしき風情とあつて  
うらみいづれに  
人丸方れいづれや  
月影はゆいづれ  
て心なりきり  
恋

凡波足つるさ  
并いし  
人





十一番

九

うつりかきほの乃橋ひみ  
 くよの月残うこさねん  
 こいさくく漱ようさあはれら  
 けりこことやささるりまはり

右

すまつしは活乃房まはり  
 こころの月まこけり  
 うさあはれら  
 こいさくく漱ようさあはれら  
 けりこことやささるりまはり









月

左高海陽口乃月と思ふてらるや後  
 世と後心昔も今もわかれぬ事  
 うきい荒ふ蛇うみ湖の浪よふ海  
 ちり思ひこきていゝあまはし  
 右乃月をてしてをまじらあ文字破  
 しるるしるるしるるしるるしるる  
 さいし心乃しやうしるるしるる  
 仍いゆすし月よさうしるるしるる  
 つしるる大と勝しるるしるる

恋

左高子命とくんと思ひこらるる  
 月とわかれし恋乃高らやうはし  
 ようしるるしるるしるるしるる  
 うしるるしるるしるるしるる  
 これはうらなうらなうらなうらな



安永二年甲午二月廿七日

伊能平藏貞文 尚

寛政六年甲寅十月廿七日求之

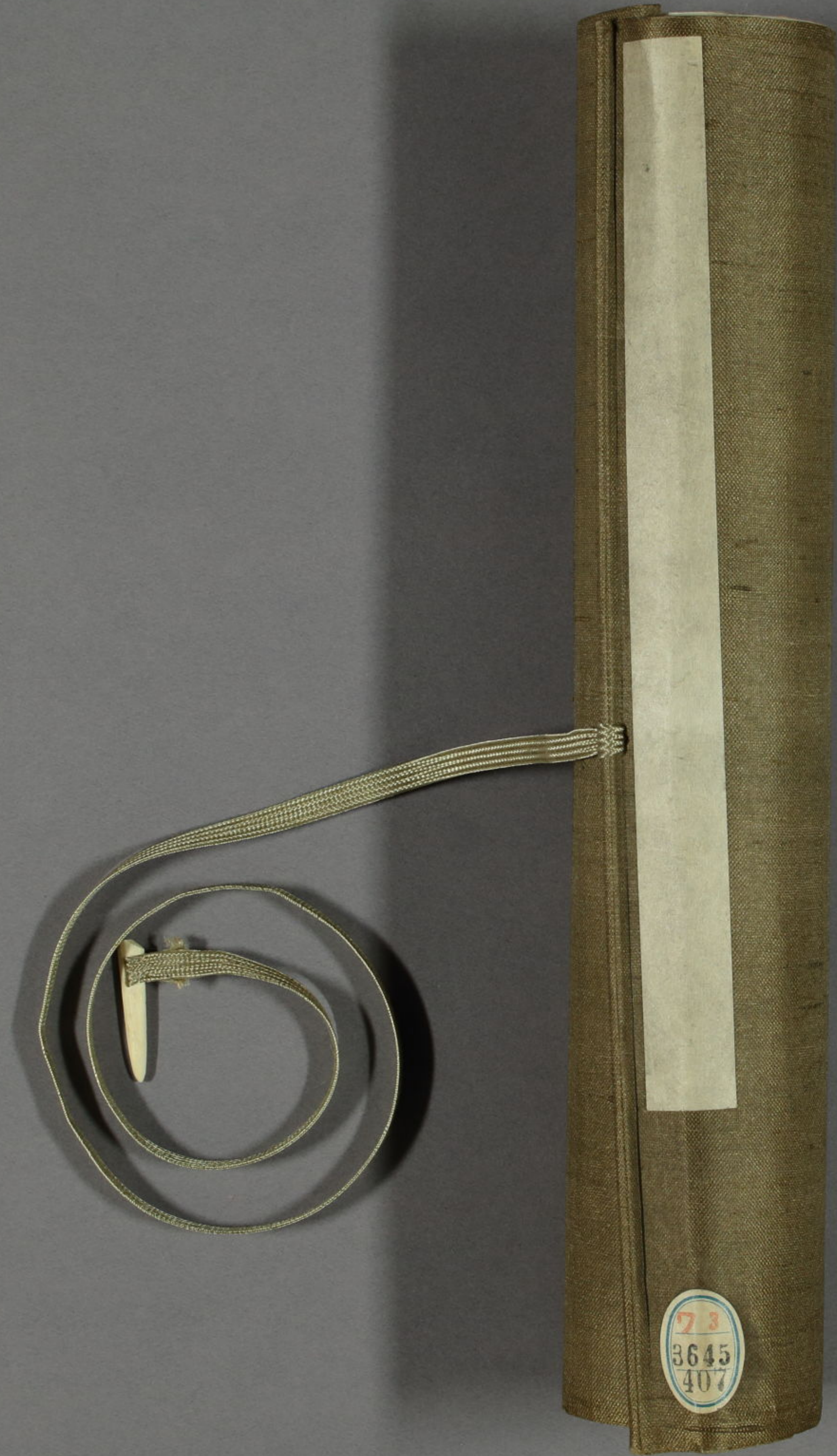
松岡平次節辰方

女

文化十二年春

本間與一重





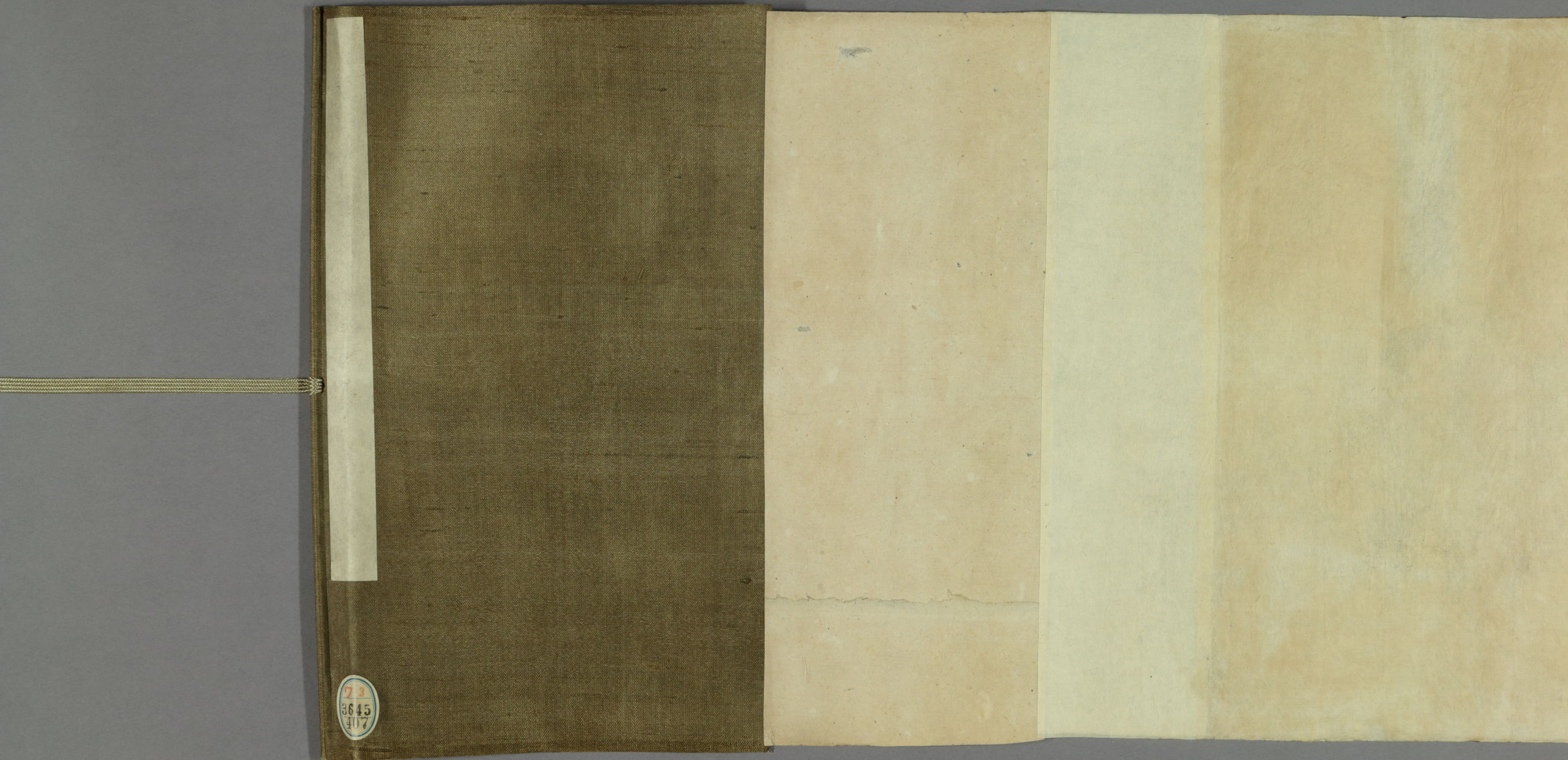


建保年中  
職人盡歌合

73  
3645  
407

7保3  
3645  
407  
770





73  
3645  
407